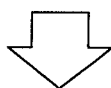


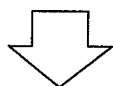
小中一貫教育について

小中一貫教育

- 小中学校間の連携を深め、義務教育9年間の学習指導と生活指導の円滑なシステムを図るための連続性を図った教育のこと。



小中一貫校 …… 小学校と中学校を統合し、「小中一貫教育」を実施している学校

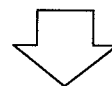


施設一体型

- 学校施設(校舎)、組織・運営ともに一体となり、小中の垣根を越えて取り組む学校。

(校長は1人配置)

※登米市立豊里小・中学校



施設分離型

- 隣接する小学校と中学校が、それぞれの学校施設(校舎)や組織・運営を維持しながら交流、連携、協働の取組を推進する学校。

特認校制度

- 当該校の特色ある教育環境の中で学びたい・学ばせたいという希望に、一定の条件のもと、市内・市外どこからでも当該校への入学・転学を認めるものです。

※ 塩竈市立浦戸二小・浦戸中は、校舎一体型の特認校です。

小中一貫教育及び特認校のメリット・デメリット

1 (施設一体型)小中一貫校の場合

[メリット]

- ・ 校種の違いから生ずる子どもたちの心理的負担を軽減することができる。特に、中学校入学にあたって安心感をもつことができる。
- ・ 学校教育目標やめざす子ども像を統一させるなど、同じ教育観に基づいて教育を行うことができる。
- ・ 学習指導や生活指導上、一貫した指導方法に基づいて指導することができる。
- ・ 教員相互の交流を図りやすく、小学校において教科担任制等を導入しやすい。
- ・ 異年齢交流学習を行いやすく、年長者や年少者などと多様な関わり方を学ぶことで、社会性や協調性などを育成しやすい。

[デメリット]

- ・ 子どもたちの固定的な人間関係が9年間続いてしまう可能性がある。
- ・ 小学校高学年にとって、活躍の場が少なくなる。特に6年生にとっては最高学年としての活躍の場が少なくなる。
- ・ 施設を新設するため、新たな学校用地や予算が必要となる。

2 (小規模)特認校の場合

[メリット]

- ・ 小さな集団で過ごしたり、他地域の児童生徒と接したりすることで、表現力を向上させたり、人間関係を再構築したりなど、学級や学校を活性化しやすい。
- ・ 小規模校であることで、学習指導や生活指導等においてきめ細かな指導を行うことができる。
- ・ 保護者や地域住民との連携により、地域の特性を生かした特色ある教育活動を行うことができる。
- ・ 選択を認めることで、保護者や児童生徒の希望に沿うことができる。

[デメリット]

- ・ 多くの希望者数は望めず、根本的に学校規模等の適正化を図ることは難しい。
- ・ クラス替えができない。
- ・ 通学区域が広範囲になるため、児童生徒の通学の負担が発生する。
- ・ 校区外から通学している子どもにとっては、自分の住んでいる地域での友人関係が希薄になりやすい。

近隣の小中一貫校及・特認校の事例

1 登米市立豊里小・中学校 (校舎一体型)小中一貫校

[メリット]

- ・ 4年生からの一部教科担任制、英語教育、少人数指導等により、学力が向上している。
- ・ 不登校や問題行動等が減少した。
- ・ 中学校進学時の不安(中1ギャップ)が解消するとともに、中学生の自立意識等精神面の成長が見られた。
- ・ 小中の垣根を越え、学習指導、生活指導、生徒指導を行うことにより、児童生徒理解力が向上し、また、教職員の研修意欲も向上した。

[デメリット]

- ・ 7年生からの気持ちの切り替えが難しい。意識の変化を促すための工夫が必要。
- ・ 授業検討会等、小中の教職員が全員参加の体制をつくるのが難しい。

2 塩竈市立浦戸二小・浦戸中 校舎一体型(小規模)特認校の場合

[メリット]

- ・ 少人数なので、一人一人の役割が大きく、責任感が芽生えた。
- ・ 意見を述べる機会が増え、自信をもって人前で話せるようになった。
- ・ 小中併設なので、小さい子への配慮できる人間に育っている。
- ・ 仲間意識が強く、自宅にいても皆で頑張っているという気持ちがやる気につながっている。
- ・ 授業に集中し、成績が向上した。
- ・ 学年関係なく仲が良く、家族のようなあたたかさのある学校。

(保護者アンケートから)

[デメリット]

- ・ 通学手段が船。職員会議等の時間確保が難しい。
- ・ 約9割が島外から(特認)であり、そのため保護者の価値観が多様化し、都会並みの要望も増えている。